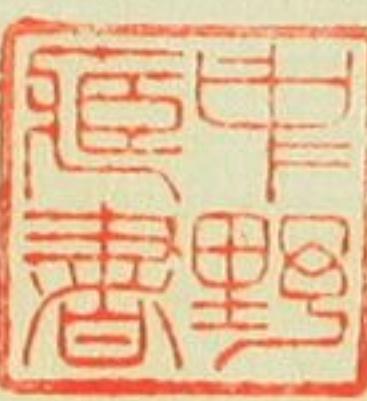




1 2 3 4  
5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100



空物絃玉琴二の毛

卷之三

此お経の年立のとよ桑原のやよすの考又あるされ更外は是を云ふ  
をもとへとのすういがまくあきみゆいんとやふものうちしひ源氏お経  
の年立を仰の改めりして玉小掃タノヲクシもあられ 例よりくしてもすてて  
ぬれど新壁ニイダリもとふて、とうとくもとをあるへばあればよ、ヒカルキミきまで  
ま徹サダとあらぬ、きとともをあるへばう漏アソ民、お経ハタケハ光あれとて年立  
を立め、アセお経のむすとさるハあらざりの朝臣アソあればこのゑのむすあふ  
トシヒジノトシ 年を始年ハサカニとハかくぬううぐの考マキのち、めハううぐの朝臣ハタケの歎ウマもて  
年立をうむべされど是コハそのとあくとも考ハタケるべられ、ま歎コトの  
ほどのあくよえのとあくとも考ハタケるべられ、ま歎コトの

きく出ぬさるうちふもまのことを云て一年とをつりまづの壇ふハ  
変のことを云ふあどやうのことをひくうちふハ同年の如きと被考  
みればやがて次年のことあるごひどものひくとあひまととつと多  
秋きふをれるゆきこのごひどひくとあひまととつと多  
もと改め經ハあどりあきときざまあるよ掲本ハ三三れることも多  
しと改め經ハあどりあきときざまあるよ掲本ハ三三れることも多  
トキシバんしてまよ一つとよ右宣本も得易くネバ良本の考べき  
トキシバんしてまよ一つとよ右宣本も得易くネバ良本の考べき  
もと改め經ハあどりあきときざまあるよ掲本ハ三三れることも多  
しも真雄んじうよ思ひ定められばともくおぼつかうれどうるものかうん  
ありとあいのどもても多くみれば三人のやうて考かまへとさて一の患よこの  
あ経のきくの序をまわへるよびきことあれど彼がよ云てハ年を之の

うよむねとぎるとよひあればまく些くよとく出云未バとの超えぐくて  
彼丈よ省き此れ小くもいすま國譲毛と樓上毛とのるよ二年のほど  
をあくらむ毛の脱いと也らればもひくと作毛のからきくあどりふ  
べれど然よはううきまべし源氏物語も二年三年もぎきしもれど  
そのもぎきし毛をいとよく云かくとてううひひらふべくとれどられよはき  
ひちひのとども、ええ何のうをもひとと云バ決く二年のほどのことひく  
一毛のうをくらめ真雄うくりふをもひくとくらめらればくくく  
れども由を云べし大室ハあうきの朝臣せ八崇の十月中の十月も生れ  
あひへと義定毛ふもえおうじきト毛ふせみ月よいぐるをと不ふ大  
室百日よりくすりよへるハ明年の正月せみ月のとて大室ニ崇も

あらうちに花室の下毛ハあらうど朝臣廿九歳大宝二歳の二月小て  
ことととむら國讓毛の娘ハ二月もうりより云出へとされバ例のとす  
あらんよハあらうど朝臣三十歳大宝三歳の年と定むづきとあれど  
然あら更ふあらうど朝臣廿九歳大宝二歳の二月のとて花室の下  
毛と同年也毛由ハ花室の中毛<sup>アガノマキ</sup>あらうど朝臣ナシツボ<sup>アガノマキ</sup>  
よりちもとあら由をひ同<sup>ヨシ</sup>毛由<sup>オナシ</sup>毛由<sup>アガノマキ</sup>の朝臣<sup>アガノマキ</sup>梨壺女御<sup>アガノマキ</sup>  
ていつき毛由の由をひて國讓毛よて梨壺女御もと生あら由を云<sup>ヒ</sup>  
アラム月六日のとをい一札<sup>アシカ</sup>に月の娘<sup>ウミ</sup>よ生あらうと同<sup>ヨシ</sup>毛由<sup>アガノマキ</sup>の朝臣<sup>アガノマキ</sup>  
日<sup>モリ</sup>は後壺女御もと生あらうと云てうくて六月よあらぬとひ  
アラム月六日あるはいともく<sup>コノイヘ</sup>此云る月どぞ梨壺女御後壺女御の  
小て五月晦日あるはいともく<sup>コノイヘ</sup>此云る月どぞ梨壺女御後壺女御の

とこよみと生ふ一月よひ一札<sup>アシカ</sup>いと年とハ定めつる國讓の下毛よろく  
て年<sup>トシ</sup>うすぬとひればうれぞあらうど朝臣三十歳大宝三歳の年とす  
き國讓の下毛ハ三月の上の十日もうりよてことととむら國<sup>タカ</sup>讓毛の娘ハ  
三月十余日の<sup>コロ</sup>ひとひればうれぞこのつぎよ大宝來年<sup>コムトシ</sup>ハあつよあらうと由の  
のつぎの趣<sup>ササ</sup>あれどあらうどこのつぎよ大宝來年<sup>コムトシ</sup>ハあつよあらうと由の  
えらればうれぞこのつぎよ大宝來年<sup>コムトシ</sup>ハあつよあらうと由の  
此をつと云るをよの傍<sup>アマ</sup>とせんよハ年紀ハ全くひるがざくあれど然<sup>シカ</sup>あ  
ざるやゑひりま<sup>ヘ</sup>ハ樓との下毛ハ三十歳の年<sup>トシ</sup>のつぎよひ<sup>シテ</sup>ざるを望むべし  
正月あれどこの年<sup>トシ</sup>の八月十五日よあらうど朝臣の家極の家よ<sup>シカ</sup>後院朱雀<sup>サガノヰナスザク</sup>  
院の両院の内<sup>ニ</sup>章のときさざの大庭<sup>ササギ</sup>七十よひますか必ず<sup>イヘ</sup>を云る小て

やふよ此大店ま六十の店賀ひやへあつたの朝臣せに茶の年トシの正月  
廿七日のをとてよひすとあれば大まをに茶よりあつたとせばあつたの朝  
臣せ八茶の年の十月よ生れウタあひへゆあればあつたの朝臣ミコハニ十一茶よ  
ありあべセに茶よりもてハ年よあひり大店まの六十の清賀シカハあ  
うの朝臣せに茶の年よひすとてハ年をかわれば六十七茶より  
ゑナニ何ナニや七十よひすとひすとナニきだまを七茶とナニうその朝臣を  
三十に茶とあられば十一年よあひぬ放大店カレま七十茶よあひれば七十  
よひすとナニとひすとナニ更是をとて大官を七茶とナニうその朝臣を  
とよひナニをひナニとナニぬをナニよナニ三年のるを  
脱オトきイフと云ダナ此脱オトセシマキ此脱オトセシマキの趣サトをナニとナニのねによ

きころトコハトコとトコすトコの中納コトコトをトコ役トコとトコぞトコめトコきトコとトコせトコのうち  
よトコくトコの朝臣トコすトコの朝臣トコよトコすトコしる人のトコぬトコとトコとトコあトコをトコ  
此二人の朝臣トコのゆきえトコとトコびトコよトコすトコでトコぬトコハトコきトコろトコするひトコと  
トトコよトコくトコきトコ作トコ志トコのいトコせトコひトコうトコ義トコ兵トコをトコまでハトコすトコの中納トコのゆきえ  
きトコとトコくトコよトコれトコど國トコ攘トコをトコハトコとトコよトコびトコきトコよトコりトコあトコすトコ  
の中納トコのうトコをトコバトコきトコをトコうトコむトコのうトコうトコ樓トコ工トコ走トコよトコりトコてトコ  
あほトコあトコト是トコよトコ傍トコてトコよトコ國トコ攘トコをトコとトコ樓トコ工トコ走トコよトコりトコてトコ  
うちよトコ一トコの中納トコのゆきえトコとトコ云トコ一トコ又トコえトコをトコよトコえトコ  
おもトコうトコせトコをトコひトコまれトコむトコ時トコをトコうち風トコの琴トコのりトコうトコよトコきトコかトコへトコ  
歌トコをトコひトコてトコ古トコ大トコ店トコおトコてトコあトコひトコまトコとトコ

トニ  
タナ  
カタ

とくうば七巻うち葉人ともとつづりをす とくうば十二巻うちあらふ とくうば十六巻  
セロコロよをさる海中暴風ふもありこれ波斯ミヨ流れ著く とくうば三十亜巻母子をぬ  
とくうば三十セ巻父子をぬ とくうば三十九巻ぬ胡あま新ガ肺よみされ歿とをゆるされ東安  
学士とある一世の源氏を妻とす とくうばのもすめまれぬ とくうば式部大輔た大介  
ウルぬ とくうばがむすめに巻よあらぬる六月廿日  
のほどよ異ふより将来くへ琴をこうどより  
ま余の内くづくよひどちまあくす とくうば位を  
くづきあり三巻永極の家よすまでもすめよ  
琴あくそきす とくうばがむすめ十五巻の二月  
母よもようをぬとくうばこのことをひきと病苦をき  
きのことを迷ひしをぬ辛み十日巻をあらび  
八月廿日不まきのむとが差小毛とヤギと毛をて  
とくうばがむすめをぬあらきをあふ九月廿  
きまき二十巻 うねまき十五巻とも

タマキ  
コウマキ

六月六日あうご生まれる

あくべニ茶よりあ

あくべニ茶よりあ

古毛十四茶法師よりあくべニ父ち  
父の大ぼうをうふ年に十四茶より  
あくべニ

三茶

三茶

二茶

あくべニ茶よりあくべ秋つて廻さうのうを

五茶

辛うすぬ云ふあくべ母あとうきよかみのうほようれふあくべ始て琴をあくべ

六茶

あくべセ茶よりあくべ

七茶

八茶

九茶

十茶

あくべ十二茶よりあくべ

十一茶

十二茶

十三茶

東園の去ひこのむかひとて京みきへぐや山をあめてゆうまきあきことじた  
あきへぐは是よりえあをぐらうぐのまきのまあくあも風の琴うきあくへぐ  
山くづれて去どもまかうがまれせぬ往いくる日の年の時ぢりまでこくの年を  
ゆよ此日三うどか野す古幸のとひすと不まきとは傳つまぎへあひへぐ彼  
琴のネをひそて心のうほなあうあくへぐよつとひくへー我ぬみありと  
おほへぐもするつとひねどくまくふと公さで帰りあひ三日をうかひりて又うつほ  
よおもへまとてあくべ母子をとあひへぐニ茶の大波よりハ川よりハ西ある家  
住きをあくべ貞桂按この三うどハ朱雀院あくべ由ハこのうちよみうどの法稱みきがの  
院の法稱云云とのきふとみえうば御儀佐のとひあくべんじどもとハみくえ  
アヌとくがむすらのことわよ此山よ住とハ年よりぬ云云みえう不まきの  
ことをかせ此人の年をうむよ十二ぢうよとあくべとひすかう六茶のとき  
うほよこむりあひへ年よりぬハ十三茶よりあくべ母あ三十よすこー  
くぬほよこむえへ此時の年廿八茶よりあくべあり とくまき三十一茶  
う不まきせハ茶よりあくべー

あうとゞ京よ出で三年がほどよまでをぬことありありぬ云云

十六とゞ年の二月よくあうきよきて名をあうとゞとり小廣ことをあるさる

十六年

十六とゞ十八葉は遠みあされぬ

十七葉

あうとゞ十八葉は遠みあされぬ

十八葉

あうとゞ十八葉は遠みあされぬ

十九葉

蓀糸天毛

とくらびの毛立二

ひくまぬ年十二とすやる二月よぬ裳をす  
ク不あき年に十ぞうわといれど夷六葉よあ  
に月をうりよあれぬ

年うづく三月をうりとも 七月七日とも

廿二葉

廿一葉

梅花笠毛

嵯峨院毛立一

二月せ日あきよみめ善日社よ猪であひ同きせ三日  
京よくすりふ キスリホテあきよみめたもよむひふ  
此時のたものとをきてうぞれバニ十三葉よあ  
かふべし 三月のほどごも

廿三葉

吹上毛上

嵯峨院毛立二

すしせ一葉のすゝみ 二月せ九日あうぐものぐ  
吹とのすしのぬけへとゆきあふ 三月三日とも  
四月殺日あうぐもの人々吹とのもまとぬまちひ  
同じ日よ京よくすりふ

廿三葉

祭使毛

嵯峨院毛立三

四月をうりより云云 五月五日とも  
六月のひおひ云云 七月一日とぢう  
すみあき三十葉のすいづ

吹上宴 下

辛うすと八月廿二日より不吉と相撲のうちありとあらふ

嵯峨院宴

うなまき相撲のうちありとあらふ  
御室よりあはれ母兼香慶女師

あづ月よりあづぬ云云

あづ月よりあづぬ云云

菊宴

嵯峨院宴

十一月朔日より残菊宴一月同  
十二月と三月

廿四日

十一月をうすより取云云  
十二月終日と三月  
年うすとすゑひ内紀事家士と  
あるからおりゆきまきあらざるあすと

十一月朔日より残菊宴一月同  
十二月と三月  
とてんとよ選ばざきてととのきふたはまことよ

廿四日

ときめきあはれ西月十八日のうちのうちより  
うちそればえ云たはあさくよりの大将也  
同させ七日のぞと云ふあさくすうさうの  
太后六十の正月某日より  
二月をうす云云さみ不ぞの大君そで思  
十二菜よりあはれすまどおは十三罪そ  
うをもふ

ひて宴

正月廿七日より出うるをと不ふまどよつさうの大君家  
の六十の正月よりくつふまつうき、すみかきた内紀  
三月三月十余日をうす始の己日出きゝれバ云云  
秋深くあるあくよ云云あうへきまふとつれてものより  
まうりあらととととととととととととととととと  
られうひ志がのひがの家よりすみかきよめく  
あくひのりあ

廿四日

初秋宴

六月をうすとまも  
七月朔日とまも  
八月九日相撲のうちなうちあはれ  
とくらむすめ内侍駕よりあはれ

田鶴群名鑑

ひるる年の二三月の後すすりてまやもくとあり  
ニ生まれあふ

六月をうち云云 八月よりてあるとす女一室をあふ古事記十七葉のすへつり 同月 廿六葉  
まさくすの服老うちよ齊とすめ 貞雄按ますへせに葉あらざ六葉 すまき  
卅八葉よりすめへそとよりの服老八葉十八葉ひこま十七葉十葉十六葉  
十一葉十五葉十二葉十叶葉十三葉十三葉十叶葉十二葉よりすめり摺本よハ  
古事記のすずとぐればうくひくひくひ

羨冥毛毛

十一月をうち云云 あくび京極の家改めさんとすとまきと處の里人の相は今年をと  
とをもうり三十葉よハまだまほほいはほどいはとへうどうをもる年をうるべ云あらべ  
らればせへ年ようり

十月中の十日あうとしの女いぬままれきふ母女一家  
まきとすま十叶葉 うなまきに十三葉 うなまきに十叶葉 すまへせ六葉

うくて年をうち正月御目云云 同廿日よ出でるどとまよいねま古百日よひくすめと  
まも 美室の一室ハ二う葉とゆむ古事記五葉おもととの室ハに葉とうとむよ古事記  
ひくとめやうり 二月よりうぬ云云

國縢毛

廿八葉  
廿九葉  
廿七葉

廿八葉

廿九葉

廿七葉

お改大ほ源のすゑひまくは佐をとへ入道へあひあうをあひ古事記七叶よひまく  
二月云云 三月云云 えまきのむすめ皇み生あひ後よニまくわが梨壺女御うり  
さき不くのむすめで天十七葉母えまきのう 二十葉のほどいへり 六月よりうぬ云云  
五月をうちすめ承帝後女御ちうとめ あくびの小方女一室六月うちすめをうる  
七月云云 八月十一日よ出で葉らをひひとめが葉を院よひをうる 同廿日ア  
古事記ひく 十月よりうぬ 美室ハ後壺のうえまのうの古事記五葉お葉古事記ひく  
式歎て室の出島和十月をうちすめをうるあふ

うくて年をうちぬ云云 二月うち承帝後女御をとま生あひ 同廿日よひうぬの  
わ方女一室こゝれ生あひ 三月十日さゞの院花宴へり

三十葉  
卅葉  
卅葉

櫻上毛

赤家のほりあひ女あ承帝後女御をとまは依りて也 二月十余日のころ云 大ま  
来年ハあくつよううあふとまや 八月云云 とへうがむすめからうとどもよだまよ琴うを  
へりまふ 十月云云 十一月云云 十二月云云

正月三日云云 二月うち云云 三月のきく云云 四月まづりのいろ云云 五月の  
きく云云 六月ひづれど云云 七月七日云云 八月十五日さゞの院葉院

卅葉  
卅葉  
卅葉

そのおれの家よりましめくらをうちもとくもん張るあくは仕事ありま改  
日とくうびのむすめ正二位よか階しめとくうびよ三位の中納言を駄づき  
さうの院内年七十二 大原文七十よひまきあづま

此の考のよきをも考へられざりし  
やうにござれども考へられざりし  
もよきをばきくもよきをまつまづ  
馬をもくとせんとせんとせんとせん  
とくあくまくのやくひりーあじよ今もあくまくもの改めうんとらふ人の  
こすりふもすりかまーとせんとせんとせんとせん  
よもかひー歌よよりがはすとまふ家而又ハすとまちふどよより勇ひ  
きよけ名ふてひどあやきる在名ども多  
業のくーち象のぬ息而  
タガのひとひがのひと

誰の内子ともあられどさうとばらす事の方との事よりぬ源氏、御侍の  
系図小ハ女房達家司もうちひづるハコムジアドシ、あまくれど是よりはる  
こじひをばらか肩きぬとくよまくへりふと竹のやくろひづるナシと  
呑みハさーすきくわやひん

### 系図

嵯  
峨  
院

嵯  
峨  
院  
おお位のこと席儀位のことさうかく、支梅花室をよるむほどよもゆのまことち  
おうめあひましまもありあひ云云ひればとくうがのをよて、席儀位わづへあるし  
うれどそととばらえ、樓と窓よさうの院内年七十二よおもへ、あきどま  
六十をうみよみとあつといづ、嵯峨のとくどスハ太上皇とぞヤ

式教キヤウ之室

大  
尼  
朱雀院の女房 初秋をよ式教キヤウの女房とぞ

中  
尼  
中  
尼  
うねよかのや方 義寧をよ放式教キヤウでまの中尼十三歳みてうなまことま  
わうきいづるもあきだ十ニくぬとぞり あま又ハまの中尼ともいづ

中務ナカツカサキヤウ之室

義  
寧  
先帝の内もくよりの中尼 さうの大尼、六十の内もくよみ常樂館ちふ  
とく菊宴をよも

女  
房

さうの院内妹女房ちう清ふのとくうがの母のとく義寧をよも

式教キヤウ之室

内母これともかー

右  
手  
右  
手  
祭使をよまつての使よハ式教キヤウの事のとまのあざぶあるとぞ

女  
房  
つづくの方内年せ二或於てまのとくむすのとく田鷹群もあざぶ

さう

朱雀院

内お位のことえぎる由さうの院の系よいづ、義寧をよまさすりの小方女ヲ之室  
の内子のとくも、坐儀位よ八月十一日よま家よ内坐儀シタイをあひて朱雀院よ  
おもかくいづ、貞惟 振よわ枝のとくよ此とどの内歎シテをあバ内年  
ほど可考シテあへやうあきへくの歎シテをあへて云るよ此とどの内年を  
云うるハづあるとあひん 朱雀院又ハ院ともヤ

式教キヤウ之室

女君 桃花度序息和 女序よりもと取す む儀をよみ

女新つ家 ヒヤタブキヤウノミヤ 店母これとあへ 此家ハもやくうをりるあるべーつまごよあるギー玄教であはま

女新つ家

内みおもくまさネバとこやとまぐち

侍従 すめうりともあひだまのものとあり

民新つ家

ヒヤタブキヤウノミヤ 店母これとあへ

太府君 ヒタツキミ さうの大府家六十の店契よな平樂舞りす 菊宴をよみ

二府君 ジラウキミ おうだくまく城乐舞りす

女君 ヒヤタブキヤウノミヤ 母まことよりのふ君

女君 ヒヤタブキヤウノミヤ うねづとのか方年十ふのす 田鷦群をよみ

貞旌 接よ歎ふ君君よ民新つ家小方まきすのふ君年十八年もくす又

生みみんとするすくえられば此家をもぬすむかうざらんとあよみを

兵部つ家

ヒヤタブキヤウノミヤ 店母これとあへ

入道家

ヒヤタブキヤウノミヤ まきよの小方す一ふの内牙あらよーさうの院をよへつ

す

店母朴南僕女孫人朴南僕種松が女 吹上走よすー辛せーのすー

又さうの院九月朝日吹とのもまよ店妻のとき院の度とぞゆるう。同  
九日の宴よ涼氏をあひて名すしとあひ方のざえハあうとひくき  
すくも西朱雀院神泉よてにあがくし ちふとく度とぞゆるう

侍従よあがる又西に位左辺中將よあひり 初秋走よ寧相うるあふと  
えくも 田鷦群をよ中納云よあひあまくあ備の智うらぬ年廿

四歳のすー

若君

ワカキミ 母まことよりの十君いまま 義寛走よこうた生れあふすー

女一家

ヒヤタブキヤウノミヤ まさよの小方 后ヅのすー後京君走よみ 大宗といつ

女二家

ヒヤタブキヤウノミヤ すゑひまくのか方 まさよの小方の内妹のすーひくと家をよみ

女三家

ヒヤタブキヤウノミヤ くねよの小方 うねまく家極のくよつまかく 陵ハ梨壺女序のくづきよ  
とよをあひ内よのくひあよー初秋走よみ 一象家といつ

女四家

ヒヤタブキヤウノミヤ 今との承香度女序 后ヅのすー さうのほあと

新家

ヒヤタブキヤウノミヤ さうの院をよ新家のくづきよーいれば時うちあらうあらべー 横うきよ  
店母さうの承香度女序をもよより新家をあらあくも朱雀院の  
あらうあくもよいつ

今上

人道家

卷之三

帥  
文

カキニ  
若君、汝母とおまきの中志のすゝ因縁群をきよも

六家

新編  
卷之三

七  
文

10

八  
文

九  
家

十  
三

三  
二

ヨミナニノミヤ

ラミナサムノミ

ヒヅギノミヤ

三  
七

卷之二

二 宮

内安後壺女御と弟あきの大君 国穰を生まれあす一歳又三歳今生れあ  
あづほのことをゆすすめと辰巳のちひくとて親王よりうひあづほのハ  
ニあれどひきこべよかへあとづく まふとや

三 宮

サムノミヤ

三 宮

シノミヤ

三 宮

カミツケノミヤ

上野 宮

内安後壺女御二のああれどみうどのほんとうてこのみやすへあと既う  
義昇をよね辛に叢みうづみうづみ  
内安後壺女御 いままとよか 究をよみ  
御安承香後女御さうの院の女はまのすへ お穰をよみ

三 宮のこうせと

ミハル

こうかとの皇子とゆいやしき人の後よりまれあひ三宮の氏をあつあふ  
宰相よて方大兵うちぬ又房府うちむ中納言より又大臣より  
あふ七象大兵のほど二町の西より住み後より位をくへ英波をあつ  
あふと義昇をよみひく家をよひて家主よひまあづの後より

后 宮

カキノミヤ

嵯 嵘 院

サガノヰム

后 宮

カキノミヤ

承 香 后 女 御

シヨウキヤウヂウミウ

后 宮

カキノミヤ

接 壺 文 衣

カボノカライ

后 宮

カミナヒノ

祚 南 伎 女 祖 人

スザクヰム

后 宮

后 宮

カミタヒノミヤ

ひまわあひ七象の家に象の家をちへやるか壇井ひあひみこすり  
あふすいづれ 初秋をよさうの大后まへ七十よだまづくといづ  
大后まえハさうの大后まづく

菊宴をよ月廿七日のぞくよあとすりのわ方大室う十の内契をもすり  
ゆきともや 楼うをよさうの大后まへ七十よだまづくといづ

承香後女御 部安の内母うをもすりと樓うをよみ やまとひづくひて人のゆ 初秋を

ゆきともや さうの承香後よ

接壺文衣 構のちうがく株うをよみのか方かとくのとくのとくの清味のすく義昇をよ  
えり又ちこえのとくしがどといづれ おもをよづきをみのよづれ

祚南伎女祖人 祚南伎のくわまづぐむすり母大納言源ひづくねづむすらすじの

中納言を生てあうをゆくよづくとをよみ

朱雀院

吉政大臣後承家まづぐむすりとすりとすりとすりの妹 今との御母のゆく  
ゆてまきよも后りの室子さんあたしもすりと お穰をよみえられ

ど今工のをまふ良七のとを今一人ハミえあを文又おみドモニモ中  
まとも

シシウダムノヨウ  
仁孝廢女御

左大臣源のまきよりの大元母さうの院の女一室 義承孝惠とよ男守正人  
女ま三人の内母のとくも又女御のとくも合て七和ナニ葉より  
あであるとくを云り初秋至るの女御のとくも 因鶴群も惠とよ  
もともへ出生かふと云るハ去年まれかふ十歳をふくいバ也  
後うけの生よま家の女御とえハ改女御をりつまびすてハ  
仁孝廢女御とのとヤ

ギキヤカミヤ  
式朝の女御

カウイ  
文

故式朝のむすめ初秋至る國儀をよせのと中元の婦女御  
の内ひくとい

これとてあく九室の内母のとくも儀をよ

## 今上

アチツボノ  
義壺女御

左大臣源のまきよりの九室母さうの院女一室 義良の御女ひくもを  
よし年十五の十月か日清条内のこともひくも後よ中元と  
あるとくの内方大元の内ひくもあくき后づのとくもとくもを  
よし又御年二十のとくも

承裔廢女御

左大臣源のまきよりの九室母さうの院女一室 義良の御女ひくもを  
よし又御年十六のとくもとくもを

宣懶廢女御

左大臣源のまきよりの九室母さうの院女一室 義良の御女ひくもを  
よし又御年三十のとくもとくもを

妻の内とハミテ文

ヒキヤウデム  
藤景廢女御

左大臣源のまきよりの九室母さうの院女一室 義良の御女ひくもを  
よしハミテ文

梨壺女御

左大臣源のまきよりの九室母さうの院女一室 義良の御女ひくもを  
よしハミテ文

梶花廢女御

中納言年のまきよりの三室母さうの院女一室 義良の御女ひくもを  
よしハミテ文

梶花廢御息所

左大臣源のまきよりの三室母さうの院女一室 義良の御女ひくもを  
よしハミテ文

放式朝の女方

アキタクタカ  
文達小方

ナカシキタクタカ  
中勢の女方

左大臣源のまきよりの中勢母さうの院女一室 義良の御女ひくもを  
よしハミテ文

或然の女方

アキタクタカ  
梶花廢御息所の内母

又

アキタクタカ  
梶花廢御息所の内母

兵部安方 これとよ

民教ては安方 ヨリヨリの夫君安女一家辛十七歳のす 茂原をよひ

兵部安方 同き十一君母ち改大臣素女八月廿八日よりアリト田鷹群を  
キムシ

帥宝か方 カミアミの中君辛十六歳聚景庭女序とハシツのす 田鷹群を  
キムシ

み安小方 カミアミの夫君辛十に歳のす 田鷹群をキムシ

すの朝臣小方 マミアミの千君安女一家 田鷹群をキムシハ月三日より宣令を

上野安小方 舎人まぐもすりて室の人代よえあひ一也辛十六歳をのよー

ミハル 三妻のくともの朝臣小方 富士市女徳まもといつをとめて店妻トモヒアリ  
トウキテ後よだうせーと茂原をよひ

すゑやきし 源一世源氏 初秋をよな大臣從三位源朝臣すゑやきしとあ 田鷹

群をキムシハ月十日より改大臣よりアミ小西儀をよ内侍を

さ木より 入をしきひおうをあ小辛七十よりアキヒトリアヒヲカヒハ二月

十七八日の辰とアミ一又大臣どめとハヒトウハノ内侍のよーいヘルバ  
マミヨウナの内侍也 因幡群をキムシ大臣どめとハ改おとゞ也

さ木より 太師君梅花堂と民教て源のさ木よりアキヒトリアヒヲカヒハ二月

大納言兼民教て源朝臣さ木よりアキヒトリアヒヲカヒハ二月  
一ハ改おとゞ一又ハ民教てとのミツア今がよ民教て家とある一こと  
石くわればんとミミ

男君 マミアミの三君ふとくみおとすす 茂原をよめ 副宴毛  
フミナキニ

女君 茂原院のみまの小君毛筆毛筆をふとくみおとすす  
カミアミの三君ふとくみおとすす 茂原をよめ 副宴毛

さ木より 二弟君左近中将のす 茂原をよめ 初秋をよなをのよ木不

中將とアミ 稲井毛とよ殿中將とモ 宮様をよ新宰相とツア  
マミアミの三君ふとくみおとすす 茂原をよめ 副宴毛

カヌこのゆすのとくみえ

三郎君 宰相のす 茂原をよめ 初秋をよな大臣どめ三郎君  
カタアヒトイアヒツテ毛筆をよびてままであるみぬ年入りの後おひびかひて

小野の山莊よこゆり居まする。因縁老よ中納言よすりかまくハ  
系宰相又宰相とひり後よ朝中納言とひり

清寧派卷之三

卷三

男君コトコヤニ  
母三衆ムツジウのノさうの院イエンをよ年十三歳サンジヌメよりヨリかみふすもカミフスモ おきごとく

女君 母おやじさうの院より年十二歳のうゑに御讓り年十七歳のうゑに又西糸菫のうゑと云ふ

九三十九

キタカタ さうの先女ニ家まよひのト方

十一

人をもすまのとで年既ひとよひやうれ云云たるよてあくよもく

さく不よあふ方

さねゝか方 時のうむごちめのうづきの女年十に暮よてさくやよ嫁かひて學  
そを老十二歳はうづきのうとくわざふべひてまよらひつきあひてすまも  
られひ三室坂川の家よすまあづきさがの院まよも又三室の家  
よ住みあひ志望の山中のおようすまよふこと萬宴をよいす  
園寝きよゆすのとぞ思ふもよ三室の家ようすまよかとまも  
三室のとぞ

卷之三

位大納言 后宮の三家の大宗の席どよに丁よていうやきこまわほやうより  
すりてみづくとすくをよいづる又年三十衆まゆの山苗の師ある  
すも 祭使をよか母友氏されば大學勅學院が南とうれりとひり  
菊宴をよまえ大まを辞ふ吹よきよ大納言正三位兼行方辺浦大納  
陸奥出羽按察使源朝臣あさとすくとも 因鶴群もをよむ大臣より  
き、 菊宴をよむ年六十に至るとも大將を辞きよ又正三位よか隨侍の  
國儀をよむ大臣よりすゑなまくの内事あることハ既うり 大將ど  
スハ太大臣どもの大臣どといアヌミハおどとのとのもつづ

一  
二  
三

左衛門女一室 たゞ大年宰相年三十歳のよ／＼後家をよ  
群をよむよ 指中納言よあらう 美男をよ方あつ督よあらう

太郎君 母一世源氏 菊宴をよさうの大后文六十の誕生日すらも承教あふ  
よりも

二郎君 母おみド年十二歳のとく田鷹群をきよる

三郎君 母おあぐ

女君 母おあぐ

ちろすと 二郎君母女一室 太主清休宰相年廿九歳のとく義家をよる  
祭使をよ太主清督 田鷹群をきよ大寺よりも

太郎君 母平中納云まことじまことの中元のとく田鷹群をきよる

二郎君 母おあぐ

三郎君 母おあぐ

四郎君 母おあぐ

五郎君 母おあぐ

すとすと 二郎君母女一室 太主清休宰相年廿八歳のとく義家をよる  
田鷹群をきよ宰相よりも 義家をよ宰相中将とも也

一ととく君 母源氏さうの大后文の六十の誕生日よりも菊宴をよ

ととく君 義家をよ宰相中將の君の内ある家をよて八歳をよりあてて  
とよひり云云もとへ大后文の誕生日よりも菊宴をよとハガキもく  
内家のとハニモ更

うづうづ 三郎君母女一室 太主清休宰相年廿七歳のとく義家をよる 初秋をよ  
おと中将よりも 田鷹群をよ宰相よりも

ひきすと 三郎君母女一室 太主清休宰相年廿六歳のとく義家をよる  
義家をよ去ま亮るあま。 お猿をよ云殺大捕よりも  
うすと 三郎君母女一室 太主清休宰相年廿五歳のとく義家をよる  
義家をよ方國の大捕年せみのとく義家をよ三歳のとく  
義家をよ方國の大捕年せみのとく義家をよ方國の大捕年せみのとく

かうすと  
家妻をよむ店あおの後思ひらがひてうをあひて、つうをも小年廿九茶  
をうみあひき

八郎君

安おあド 大店ま六まのす 茶系君をよひて店名ハ三毛更

きよす

九郎君母おほいどまへ 武船西慶上人年廿二茶のす 茶系君をよひて

ありす

十郎君母女一室 太宰房延義人年二十茶のす 茶系君をよひて

ちくす

十一郎君母おほいどまへ 年六茶のす 茶系君をよひ 梅花茶走  
み大まちすとりて 茶系君をよ内差のうと義人のす も又アリす

みくちもひもまきよ う又お邊が将すありき 國穀君をよひ

十二郎君

母女一家年六茶ちくすとおあド年又生れあひす 茶系君をよひ  
左官つ佐と茶穀君をよひてハ此君をよひ

大君

安おあド年三十一年内母家のゆきと朱雀院よつまくともひ男ま  
女まのまと生あひ一の女御のす 茶系君をよひてひそめのゆきに

奇歎女御と云初秋をよ仁孝慶の大將のゆき而又一の女御大將ざ  
仁孝慶といひてお委干朱雀院來

中君

安おほいどまへ 年廿一茶さぐの院のゆきと中勢て室の小方のす  
茶系君をよひ

三君

安おあド年十九茶さぐまきの小方のす 茶系君をよひ

四君

安おあド年十八茶さぐ不よりの小方のす 茶系君をよひ

五君

安おあド年十七茶民船ひ室の小方のす 茶系君をよひ

七君

安おあド年十六茶さぐまきの小方のす 茶系君をよひ

八君

安おあド年十三茶ちくすとおおと太大臣とまきよまきあひす 茶系君をよ

九君

安おあド年十二茶ちくすとおおと太大臣とまきよまきあひす 茶系君をよ

十君

安おあド年十一茶のまきとおおと太大臣とまきよまきあひす 茶系君をよ

十一君

安おほいどまへ 年十茶のす 茶系君をよひ 八月廿八日お盆の室よ  
まきよまきよ 田鷹群君をよひ

十二君 シツニノキミ  
十三君 シツサンノキミ  
十四君 シツヨンノキミ

十二君

オトコ  
カム  
ヅタ  
キタ  
カタ

三

おれよりの方 美原君はまだ 大家といつて  
まだ富士山へ、ついで

又

くすみ方 一世源氏幸サハ舉あごち一不ハ女ニ重ハ男のトコ田鷹群も歩き下る

せぬすと小方 率て納まゐるひまゝの中々  
す。刀馬の筆もまた、

十  
年  
一  
月  
丙  
午  
孫  
氏  
辛  
巳  
三  
歲  
子  
也  
生  
于  
此  
國  
鶴  
群  
也  
也  
是  
也

あるべきのうえより尊き三事のうちの第一

小方  
卷之三  
十一  
國朝新編。卷之三

100

ひきずミの方 邊にモの構系のむすみ年十ふ葉ハあめくすシ因鷦群ウツクニをきよも

大政大臣　オホキ　オトヲ  
義経　内名三え吏　とううぐの史をよう不まき小野行幸の内佐よさづひゑ

中將

卷之三

初秋是より左大臣後二位義家朝臣（さちにん）とまきともみゆ因幡群守是より左大臣  
ありあく、小笠是より義大臣よりあく。是年二十十九歳をもありありあづ。

左御主のよ、義宗をもよも 梅花をよだす 督さよまき

太常君

大君

母おあぐ年三舉よりあすくとおはせよみ

二君

母おあぐおはせよみえへ此あらむ

二席君

右席の替役君のとどくと後承君をよみの祭使をよめ

宰相

といひ

三席君

左席の名をえ吏 樓工寺よ後宰相の内侍のに位のがたとみゆ

く

四席君

右席の名をえ吏 おとくのぞうと樓工寺よみのまきよの八君

く

五席君

左席の名をえ吏 おとくのぞうと樓工寺よみのまきよの八君

く

六席君

右席の名をえ吏 おとくのぞうと樓工寺よみのまきよの八君

く

七席君

左席の名をえ吏 おとくのぞうと樓工寺よみのまきよの八君

く

八席君

右席の名をえ吏 おとくのぞうと樓工寺よみのまきよの八君

く

九席君

左席の名をえ吏 おとくのぞうと樓工寺よみのまきよの八君

く

十席君

右席の名をえ吏 おとくのぞうと樓工寺よみのまきよの八君

く

十一席君

左席の名をえ吏 おとくのぞうと樓工寺よみのまきよの八君

く

十二席君

右席の名をえ吏 おとくのぞうと樓工寺よみのまきよの八君

く

十三席君

左席の名をえ吏 おとくのぞうと樓工寺よみのまきよの八君

く

十四席君

右席の名をえ吏 おとくのぞうと樓工寺よみのまきよの八君

く

十五席君

左席の名をえ吏 おとくのぞうと樓工寺よみのまきよの八君

く

十六席君

右席の名をえ吏 おとくのぞうと樓工寺よみのまきよの八君

く

十七席君

左席の名をえ吏 おとくのぞうと樓工寺よみのまきよの八君

きよ八月朱雀院の女一室をも又中納戸にて左衛門脇うちぬ檢非違  
使ひ勘定をもるより、いづれ 義宗をよむを浦大將をもふ ま議定をよ  
大内義よありきふ又二位よか階へ按察使をうながす年三十日余をう

さよありかばー 後又義中將とも中納言とも大將ともいふ  
多羅辛國の事、車へ九条をあらはりあらひ巴を駆除する

安一條家年十八歳のよしのく家豈はる 梨壺文序とひよ

おまへはおまへのうへ  
おまへはおまへのうへ  
おまへはおまへのうへ

此の内母あり中止ともいづ  
母生達院女一家、収容といひて十月から之の十日は生あふよ、義理を

母慈省門一  
よもめ 樓上きよ本年ハあつよありかとりて琴をひくとゆき  
母がかづか裏山は二月莖葉萬葉あとも

孝子伝

小旗游

卷之三

まきの方

卷之三

又  
元史中卷

又  
まさかの八咫鏡

うれしきふ方 さうの院の女三実

又  
「  
とうふがむすめ  
へ

小方 神極のミコト  
放式歌ハタケモノの中君ノミコト

又  
涼のすらかうのむすり

又  
稿のちふう昧委于

又  
你宰相中將未だむ  
ちくともみえれば居

もすると樓工をよいアリ 宰相のアリとリ

かうざ小方 おあど七君母おあど年十に舉のすく後承恩をよみ

かうざ小方 茶雀院の女一ま母仁壽慶の女序妻子茶雀院家

太政大臣 墓由名三元多美史

ちうば うーお乞えよみ

女君 オミナキミ  
梅壺又妻子嵯峨院家 後より不まきの方よりおひらめくとすくわ  
られもして序甥の夫乞わざりの序よりあふるふまきよりハ年ごよあくまき  
タ由我冠冠色よみ むとぐの恩 むとぐのそといづ

右乞

ちう公のじとうみ母一世源氏 年十舉にて歿とさきをあふ後より母一象のうへの  
さうへらすより世をうきとのよ思ひそく法師よりあらかと右乞えよみ 梅花  
茎走よ左毛の細より粗より年二十年よりあんゆるともも 次工坐よもと院のひざ

よかま 横上恩よお乞借都といづ此時年四十举がりよあくあふ

べーお乞あこた五あどいづ

太政大臣 法族小方

太政大臣小方 うれき三元多美史

ちうざ小方 一世源氏年十に舉みてちうざの小方より十六举の五月五日  
お乞を生身の右乞み舉の二月うちあくと右乞よみ年二十举を

うれき三元多美史

又

故太大臣さづつねの小方よつねうをあひては此め方とく云よりあひて  
ちうざよひひめのうとくの王あるよくも年六十举をよみ  
きのと右乞をよみちうざよひひもと七年うちあくと右乞をよみ年二十举を  
あひとひてちうざよさくへうどしあひも由ほの行くもれとすきやれ  
あひほおこう(あひきぬとあひきび)が右乞みひがのゆくよすきくや  
ーあひれもとくと次工坐よみ一案のうといづ

平中納言 今とのゆふことのうく後承恩をよみ 梅花蓋をよ中納言  
まきよかくす 平のまきよかくすといづ 初秋をよ中納言促ニ信平朝臣あきよかくすと

まひまきのこのことひ

もとすな 太郎志 梅花姫は太郎湯屋もとすなといひ 初秋をよ平中納戸どく  
を舟をとすなとも又太郎中納戸といひ

ノラフド 義人 二郎志 梅花姫女房のちくわのよしゆにてまきよゑ

シキブジヨウ 武教座 三郎志 梅花姫女房のちくわのよしゆにてまきよゑ

オホイキニ 大君 室のひととまえ吏

オホノキニ 中君 オホノシラキタカタ オホノシラキタカタ オホノシラキタカタ  
をよみぬ又平中納戸どくあうのよしゆ

サノキニ 三君 今この桃花庵女房 年十六歳たゞのよしゆにてまきよゑ

オホノシラキタカタ オホノシラキタカタ オホノシラキタカタ  
まきよりかくしむ族小方

オホノシラキタカタ オホノシラキタカタ オホノシラキタカタ  
まきよりかくしむ族小方 されどかくもとすまきよゑの母

又

まきよりの十二天 因幡群毛をよ八月せ八月よまきよゑとまく

キヨハラノ 清家某 トコアリ

トコアリ

式教大浦 大大寺 大納戸のよしゆうのよしゆうのよしゆう年八十歳よてうをあつり

トコアリ 年十二歳よてうもありありとせなあり對葉よしゆうしき式教座よかく年  
十六歳よてうこーへせばれ海中よて暴風よおをとあこれ波斯毛よ流札葉  
きとぞまう考るこせニ年よて年三十九歳よこよりよる父うきて三年  
母うきてふ年よありぬお式教が捕よあさる廢とせゆるされま家景士とあぢ  
又式教大浦よて大寺うらぬ後よつとせくへせばり三宗承極よ家造りて  
住り又沿教でうらなる宰相よあさる承極のよしゆう十五歳の二月よ小方の源氏  
う年よしゆうと同じき三月ようをちるよしゆうしきのよしゆう年五十三  
回舉だるよあらきべー 横工をみ三位の中納戸を擔らそとまく

母一世源氏 とうう父ぐゑせ一年の八月中の十日よを政大臣実茂社よ猪で  
きよときの子の四郎志うねまきよこまきよこと君と寳えしげつめのうれは三辰を  
モレとぞぐわあひおも夜よひひときめひげすゑうそと安めくらう九月  
もううようらぐわひのもの三あをぬすいづあくくりハ十又歳よありくらま時  
よき十六歳の六月六日あつて生あふあくびとくせよ山のうほよくれ  
あるハ年二十歳うちよありあつてあるよーへ年をうり徑てうねまきよ  
やううよううね出されあひあくどくもよみよこよ出あひ三宗の大源ようハ  
小坂川すりハあある家よすもする時年三十歳よくうぬやどくもえくハ廿八

たをかく將孫のからすりハた大臣するからうのニ弟ありときざの院ある  
菊宴  
からすり  
きよらう人ヲが將といづりひくまをよひてまきよひまゆるの後ちひらび  
やひてあ法師よあすみひ水尾のみよこうりよもるゆくもんふ襷をよみこりの  
のままと委よひするが將又らう人ヲが將といづりは後よ水尾律師といづり  
う木まきふ方年三十余歳ひそびのくハ兄のめねやもまくらうと充寧也

タラウキミ  
太郎君 母を承のうやすむすみ 女君よハひとかづのキ  
ジラウキミ  
ハ何とも親よハまことにとくに承きよも

カヘヅウキタカタ

すゞかうか方キタフカタ  
えれともや

良峯某 ヨシミネ

これもや

幼名ちかとの慶工童 父より木のまともに茶葉へぐすり一時りうといへ  
うれひとうとまぬ十歳近くからこゝるゆゑを文學よりくもろくのほどとぬと  
やうこころもてハ年とほは交易のみよつてうづまゐるあらざれて  
或於里うちの差人シマツある又左筆依すあつまの慶工をゆるされ  
まの琴の附ふまつるすシマツ君君君をよみ。初秋也とよが將めまことに  
田鷹群タカヅクニ君をよ宰相中將とある。義寧君ヨウノ君をよ太大兵タケイ君とすと  
孟孺君モンヌ君三位よあさる。うすとそらうが將又良中將ともいづ

やまとく内族小方 ミツアキタタノカヌ

良峯某小方 ヨシミネノキタタカヌ やまとくの母モトカともや

やまとく内族小方 まきまきの十三君ミツアキ君をよ八月せ八日よまきまつあとも

あらうば 茂原遣唐使參議モハライシヤウジ大兵タケイつとものくわよのちをよくとシテ祭使サヒ君

すゑあき 七歳よて入學へことし三十ふ歳のすシテ祭使サヒ君をよみ。次とせよすゑあきうへ  
らきごとのとくとくさざの院吹イエンブイとのちまよみ章のとくとくくべき仰アガフ又内ナカの  
もとど紅葉レバ實シタくシタけをよかされ方略の宣アガフくことくめ  
さざの院吹イエンブイくすり六十の絃ゼンなり大内オヘイ紀キよあされまえ学ムダク士シテとあ  
内ナカの辰タツとよゆるさる。田鷹群タカヅクニ君をよ太大兵タケイすゑあきとくめ又太大兵タケイ太近  
かシタ將シタ或省シタ文章博士モハライシヤウジま家モハラ家モハラ院の慶工ヨウコウをよみ。親の時  
よりくまきうりとよよあてシタが將シタハラキハラキをよアリ又年に十歳ハシナよありの小  
といづシタ孟孺君モンヌ君をよ宰相ザイザイとくめ三位よあさる。うえいシタの三ミいづシタ真雄  
按シタ孟孺君モンヌの字シメ者シメル也シテ陶英タケイもべ

あらうばミツアキタタノカヌ 小方カタ すゑあきの母モトカともや

すゑあき小方 ミツアキタタノカヌ

いづ

ますりうば 滋野スニワ太宰權タツイシヨウ年六十歳ハシナをうのすシテ茂原君モハラ君をよみ。祭使サヒ君シタもびの  
宰相ザイザイをよひあらそへやすとシテ老シタひぬシタんシタくとも七十シナよハシタまシタりシタみシタりシタみシタハ

ざんといづひてまきよ法教でのすもの又善後の科よりくほ豆擅野  
はまくとこもゆ

うすまさ 太郎君あるべー方邊カタハシが持上野家を隆ちかて塔舎タカシマあまくすの  
仰アツムことからくと内幕ナガシマれどくと善后老妻シヤウシヨウをよみゆ梅花メイハをよ方邊カタハシがね

すすまさとづひてまきよ父の善後シヤウシヨウの科よりく長門權介チヤウジンカイは辻ハタケる  
お嬢オノコをよゆるされ

モクノカミ 本工丸モンゴウマルモクノカミ 本工丸モンゴウマル人うらるすり善后老妻シヤウシヨウをよみゆ祭使サセイのさまでハラキマジの  
オニ昂オニマツ志のびくやま父の善后シヤウシヨウの科よりくお嬢オノコをよゆるお嬢オノコをよゆるされといづ

式教座シキブノシヨウ 善后シヤウシヨウ茅刀マダラのすり善后老妻シヤウシヨウをよみゆ祭使サセイとづひて祭使サセイ  
のさまでハ本工丸モンゴウマルの身太郎君あるべー父の善后シヤウシヨウの科よりくちあくる  
お嬢オノコをよゆるされといづシキブノシヨウ ますばのわふを男ふ人女に人とまえしと

このあらざりよりがハ三え更カムジウキタカタ ますば族カムジウキタカタ族カムジウキタカタ小方

ますば小方 つうよてうをよするすり善后老妻シヤウシヨウをよみゆすすまさの母カタノカタ

うすまさ小方 それともかー

フモノガタリ お嬢オノコのもの人々の京湯キョウヨウこなしてつぐくとおハラハラねどもむしネとくとく一人

人ヒトのこどり出ハシルきり行ハシルよくとづねあへよハまごひるべられどぞしハまご考カガ  
ぬハシルき人ヒトよよきくぬ貞雄タヂヲがうるむ写卒タシニあくぬハシルかハシル善本ヨシホニの世ヨよ多オホうるべられを  
夫ソノおれアラタりて改ハシルめぶこの云ハシルとハシルせよひハシルごとも出ハシル本ヒトデキへくらむものハ哉イクタビまとかく  
考改ハシルむハシルきよくハシルかハシルれバ改ハシルかハシルあハシルべ

ますばカキ大カキ木カキ

とうばの走

とうばナツ七ナツ葉ナツかても羅ラ人ヒトとあつづくをす 同ドウ十二トトロ葉ナツよてうあアラカシあアラカシを士シテ  
ある 次年式教座シキブノシヨウよかわり 同十六葉シシテかてもろこトトロをハさる海中暴風カミナリ  
暴ハシルひて波斯ハシル坐シタよかわり 同三人ミドリの人ヒト琴キムを学ナラ、同伐木カキルの影エヌを尋タヅ木ヤマフカク山ヤマフカクいりハシル  
ア修羅アスラ桐キリ大カキ樹キリを伐ハシルをそ波ハシル樹キリのものヒトツ一ヒトツあアラカシコアマ天アマ若アマ子アマ天アマふくわひて



又三弟の小方とおひつまをもとあると十六葉の二月よりあつておひつまをあつて  
ゆるハお當今のもうどをや 葬せあつ處とをゆる 同十八葉侍従よりあは 同もうどの中和よて琴絃歌  
太夫将 うそまきどり相撲のうそまきどりあらうなた居とまえしハすゑひま おか  
ド時は從 あらまき 琴絃歌おねよありてあらがあらすみりのぐわくあふ 太夫将より  
小方 お極のとくとくのぐわくあふ 太夫将 まきよみのま 女一まきよう よあらぐの  
琴絃歌由くまう絃

お乞坐 既に おうちうのきはまより候へまじほまちねとばらむれりせきはまくさが  
ちうどのおとせ 一世源氏を妻としまひとくを生めふ 太夫の母君 指毛をいふ  
あふ そつねの太夫をあふ 枝太夫とまつねのわ方 まきよちうどのおとせうひ  
そらあふ お乞十葉よて處とてか 同とおこやこあふ 同らとお枝太夫のゆちひ一  
葉を一葉ごとくまくあふ ちうどのおとせ内常のうきをあらきあふ まく

おうちうの紺よりあひあふ 一葉ごとくおのたえよまくあふ ちうどのおとせ一葉の小  
方の紺よりあくよひあふ うよくお方とひるハ一葉あうせ又あくお方とまくお見ハ太  
まくお お乞おまくお方の心よまくひあふ ちうどのおとせ黒代の名えきくあ  
葉を一葉ごとくまくあふ ちうどのおとせ内常のうきをあらきあふ まく  
お小方 おうちうのおとせおひ内常をお乞のとくまくあひとゆせあふ 一葉の小方  
放おとせおの物すくもネのが將をくまくひあひお乞のまくとあきとよせく  
あくよくちうどのおとせお若さをあふ ちうどのおとせお若さをあふ お老老  
お老老人よつきてお象しあふ 三とさうの院父をひちうどお乞をとづ不  
三とおと一葉のうのさうしきとよてお乞を父おとせよとまをあひとよせお  
ほ や や おひ父おとせよとせ おえあひ父おとせ海を ちうどのおとせ一葉

ごとく中れま 一象のくおどろ あひきうちの琴キムを左大將マサヨシの  
ようかあ ちうびのわざいあるさうどタカキあひじゆゑよまんとをネがひきふ 同  
きくやの琴ホトケを左大將マサヨシのと今ギよハキ  
きくやの琴ホトケを左大將マサヨシのと今ギよハキ

フヂ ハラノ キニノマキ  
東京毛里

同時ひて文  
嵯峨院寺  
サガノサムノマキ

太夫將シガウ  
さまとどりさまひのうすひとモト  
侍後ジヒあまのゆ  
あちアチまくとみづあくアキあくとみづの老シロ  
女房ウラニコト  
あくああアカアカ空アムツりてまよ歎アマタクをあくあくアカアカ喜安キエイ云ハナシ教テお大將オオシマ辛中納キンヂョウ御ミサ侍シテ  
ひてまよ歎アマタクのあアカアカ都ツまくとアキ今キナかよすあとアシタひびとヒビト連侍後リエンシヒ八老ハチロクちごまよひとアシタまの

れあきよのあ 八矢流侍従のくみか由ひて家よのあ 大将 まきよど  
キミタナオムムコト 穂平實 箕毛ちの經へあ あらく歎をひて家よおもふ 三家 年中納戻  
原さくさく 太大將 おとさまきよ平中納戻 あわうかひ上野家のゆくをさく  
お取ひまもあり 徒あく 連け徒ともくろの琴りをあらゆる歎をひて家よおもく  
徒あく 連け徒ともくろの琴りをあらゆる歎をひて家よおもく  
吉宗左大將 えだとまくさの平將 えい大内犯事まことよあくる右元ひがり  
三家まし 信達源か持らむる えい大内犯事まことよあくる右元ひがり  
歎をひて家よおもく 左とく將 源のあつより生三の事 あつよりゆきあさか  
すとあくさく あらきをあ あらすよ 箕毛とくれあふのふうよ  
たとそくれば 太大將 まきよどめよへく集ひて歎へく 同時あつよりかへてあ  
よしきうへひきふ 正月花日のかとよさうの大店家のゆくを太將どもあり  
かく 源寧相 さねの小方 二家 木子ももの事

梅花堂老 せんよ院のくみか由ひてはさうの院あ  
ま家をわからずからハガ第院草  
左大將 まきよどめの喜日 猶し あらすよ 大將と 同時去就で良機をひてひて家  
よ おうかか 同時あつよりのや將相歎のうか歌つあまく 同時人へ歎をひ  
同時にまくら風の琴 今がまく風と ほりハカシテ 琴をひて家よ歎を  
まくらよ おひひよ 同法師はあらうる題をひて家よ歎を  
おこうか まくら源寧相 云取ひま 年中納戻 二家 一 大將 まきよどめあ  
きの母 や方 あ極のと桂の家よおちく 同じてまよ歎をひく カネササ  
家極のとむく と桂の家よおちく 同じてまよ歎をひく キヨシ  
てうちか方よ御歎をひく ゆく と桂の家よおちく キヨシ  
吹上老 キアノミキ

紀のうよ吹との神南<sup>ナミ</sup>伎のまつり事 吹と歌ひひも すみとえへはゆきを  
清永のまつりが將あつまつよやく、歌のゆくをくく あつらが將あつら  
良佐<sup>ラウスケ</sup>やきまく後<sup>トウジギツ</sup>行あくと吹と歌の舞<sup>ミモト</sup>よまわりゆま とくまくびゆどり風  
の琴<sup>キム</sup>をひくのま さへよおぐゆあ 吹と歌ふてゆくのひそび  
あひあへとすらおうかの事 同<sup>ヨシブ</sup>妻<sup>ヨシル</sup>とくとくあ 吹と歌ふてゆく  
てきゆすの新<sup>モト</sup>よゆくとくとくあ 吹と歌ふてえあひとくとくよ  
ひづらきよ ゆくとくとくあ 大<sup>トウ</sup>ねどりよゆくまのとくとくあえあ あくと  
欽<sup>キ</sup>をひてまよおすか 大將<sup>トウジ</sup>よま 一<sup>ミヤ</sup>まと清寧相<sup>キニ</sup>まきのゆくを  
あすか 院のまうど さうの院 先宴<sup>アキヤ</sup>あ 秋の野山のゆくとくとくを

あまう奏す事  
院の三マヲコト  
主に幸ミニヤ吹と、天ミニキ院の院ヨシノエ吹と定ヨシノエ幸ミニキきは鞠タチよ吹と、  
人ヒトく聲ミアツびつまうりあミカノエムキュシミ九日宴ウタメす言タタキあくく歌ウタつまうりあタタキを乞タガコラ  
法印ホフシ吹工ホフシ定ミニヤまゐる院ヨシノエの三マヲど深氏モニダノガを待#てくらせかタタキうもの  
三マヲど多羅院タラエ神象カミヨウよて紀カタカタあタタキて由タタキ大將タタキ不タタキまきタタキど三マヲ柔カタカタあ強タタキのと神象カミヨウの行タタキまタタキよ參タタキつまタタキすタタキ由タタキのあひタタキい  
東タタキ神象カミヨウに幸ミニヤ實タタキ同時タタキ源氏タタキ君タタキ廢タタキとゆるされタタキあタタキ同時タタキすタタキまタタキと弑タタキ駁タタキ  
主タタキ同タタキを亡タタキよあられ方タタキ暗タタキの宣タタキをあタタキ同時タタキあタタキごすタタキ參タタキつまタタキす  
まタタキ今タタキく歎タタキつまタタキる同時タタキあタタキごタタキあむ風タタキの琴タタキ浮タタキすタタキ壽タタキ車タタキひタタキ車タタキ  
すタタキあタタキごタタキ階タタキあタタキあタタキよタタキ一タタキの内タタキ親王タタキ多羅院タタキのとタタキあタタキ神南タタキ候タタキの

タボヨア  
さあまうか階 琴師ひゆひきが事 もえちく院阿寒家アヒもあくわす  
梨あえまくねアヒ一束のよきとあふ今かよハ ひてまよやくすます歌をあらわすをえま  
去歌であ 太大將 幸牛彌去 三ま すー あくわす  
侍徒あくすニ 源づねあくすニ 云傍彷カタハラフ也カタハラフあくわす

祭使<sup>マサニシ</sup>

主一東 侍従をひてまよ草引タチツツまふ 次日また歌をひきまふ きのうの  
源氏主一とをひてまよおうか あうのわざまきよそ庚申の夜ヨイシ  
をひきまふ 同時に侍従をひてまよおうか 源寧相ひてまよおうか  
あひこをおうか 云はうすく歌をひてまよおうか

菊宴キクノエノマキ

主一東 残菊宴ミヤクノキクノエノマキシメシ 同時に主の娘ヒメキミのことをひきまふ ま家  
大将オサトキどのよひとをまわすづきをひく 大将オサトキどのま大主オサトキとひてまのゆくみの  
ごくゑ 女御ミカグラ君ノキニ仁喜ミカグラあひでり 大将オサトキのまとひてまのゆくみの  
あ 大将オサトキの神樂ミカグラへきを弁ミカグラ君ノキニさすのま 今半ミハナよつをのあと  
の車コト 同神樂ミカグラへき 同時去歌オサトキでま大主オサトキとひのぐくヒトくまえの

あひこアヒコ 侍従シテツをひてまよ歌タチツツをひきまふ さうのびくミコトかミコトの  
の家オムハキサキ大主ミヤク内母ミヤクノミタチ后ミヤクノミタチ六十の内ミタチ従ミタチつまつミタチかミタチべきを大将オサトキのま 同神樂ミカグラをひきま  
るミタチ おとせよ后ミヤクノミタチの内ミタチ従ミタチのとミタチと作ミタチをひく 内ミタチ従ミタチの童ミタチ舞ミタチ人ミタチあうよりやきまく舞ミタチ仰ミタチよ  
定ミタチま 同后ミヤクノミタチあひくミタチとの内ミタチ従ミタチつまつミタチかミタチべきを大将オサトキのま 同神樂ミカグラをひきま  
歌ミタチをひくミタチ 源寧相ミカグラひてまよ歌タチツツをひきまふ 大将オサトキのまを正月ミツバチ朝日  
来ミタチ 同のうちのひるミタチあひくミタチべきを殺ミタチをひくミタチ 源寧相ミカグラひてまよ歌タチツツをひきまふ 正月ミツバチ朝日  
さうの大后ミヤクノミタチの六十の内ミタチ従ミタチつまつミタチかミタチべきをひくミタチ 同時に内ミタチ屏風ミツタケのま  
やミタチと舞ミタチひてまよ琴ミタチ絃ミタチを 美家ミヤクノミタチ后ミヤクノミタチとひのびくミタチ あひ  
のか とひのびくミタチ おとせよ后ミヤクノミタチ大主ミヤクとひのびくミタチ 美家ミヤクノミタチ后ミヤクノミタチと  
ありあ おとせよ中將ミタチをひきまふ おとせよ歌タチツツをひきまふ 舞ミタチを並ミタチてまよ歌タチツツをひきまふ 美家ミヤクノミタチ

大主より歎をあふ 同ひて主より歎をあふ まことにあつたる やすく由を  
すそをもぐらへどちあひまどひあふ 陸の歎をひて主より歎をあふ 源寧相 大  
源中納言 三室 義中將 くまえいの大内紀とまくわきあふ 同ひて主をもぐらあふ  
源中將 うすすらもぐら  
波よ出あふ フナミチ あはれともあき歎を詠あふ 大將どのゆゑあきとを將て上巳後夜よ難  
あきひざす歎をひて主よりおもうりあふ  
波よ出あふ イデ あはれともあき歎を詠あふ 同時主より歎をひて主より山  
義中將歎をひて主よりおもうりあふ 源中將歎をひて主よりおもうりあふ  
波よ出あふ 邪波曳をくわく歎を詠あふ まことにあひ歎をひて主より  
源寧相相契あひ強であひくをひて主よりおもうりあふ 大將のぬく歎をひて  
主よりおもうりあふ 同ひて主よりおひきトあひくよつとき歎をあふ 同歎をひて  
源寧相相契あひ強であひくをひて主よりおもうりあふ 大將のぬく歎をひて  
主よりおもうりあふ 同ひて主よりおひきトあひくよつとき歎をあふ 同歎をひて

くひてまよ歌をかふあふ おひてま 年中納戸 三ま 蔵中將 源中將 義人アシトキが將あま  
は後戻アモ 云湯佐キミ えいの大内紀 おき まえ 源宰相アモ  
源宰相アモひまざひかへ 云湯佐ヨビ おつと歌をわ  
くひかふ 又云湯マタ そを呼てのあひをす事コト 同号ヒエひよあづシニイ死入りあふ おひひ  
あづかひ日枝ヒボよまうくミズの内修法ミヅバホウ 來キタクタ 同小方ミヤ三索マツカサのくすきやれひな  
おまきともよ志コタチ賀シガノヤモト山ヤマがよろりの東ヒタチ 同じえのふよううすくミナ路リよて 蔵中將  
ききこよ連ミヤノマキかひ三索マツカサとあづび居イヘあふ家タチともあくタチどもあくタチをあふ事コト

事あつまふ 源寧相アキラカミうきを云はば もよおすかかく 侍従シテイツあすみ思ひづくひま  
同志カズミよひて空射面クイム一イチま 同志カズミえりゆゑひまふ 源寧相アキラカミえりゆゑひまふ  
ひて空欲アヒヤヒツギをや後ハタハタよまうかふ 同志カズミえりゆゑひまふ 同時オトナシトキ源アキラがねあくまうモ  
ユ元ウツキニとものづくツク一イチま ひて空アヒまマおのの後ハタハタ源アキラが將ホフシ活ハシメ師シキよあすかふ ひて空  
ときやきアキラま家アキラの女アキラ御アキラきヨシの奉マヲ ひて空アヒちチまマか 大將マサニヤウどあふ  
すものほ後ハタハタひかヒカ由アキラをま家アキラよ啓ハタハタ一イチま 同時オトナシトキ  
空アヒくクせのまマりリかカくク欲アヒヤヒツギ詠ヨミかカ 源アキラが將ホフシの津アキラ岬ヤマすスまマざザのをヲくクかカ ひヒまマ 同時オトナシトキ  
空アヒよ後ハタハタ中シタ將ホフシ源アキラ中シタ將ホフシ去ハシメ活ハシメ師シキどもドモひヒまマ 同時オトナシトキ將ホフシ津アキラ岬ヤマすスまマざザのをヲくクかカ ひヒまマ 同時オトナシトキ  
空アヒよ空アヒよ空アヒひヒそソまマかカを源アキラ寧アキラカミ相アキラカミ欲アヒヤヒツギかカ長アキラ歌アキラとトまマかカ 同時オトナシトキ後ハタハタ空アヒよ空アヒよ空アヒ ひヒそソまマかカを源アキラ寧アキラカミ相アキラカミ欲アヒヤヒツギかカ長アキラ歌アキラとトまマかカ 同時オトナシトキ

大將どのよ此會どものらうひるとぞとちをかふ な大將どのは 大宝とへこのうくと  
オナジトキ ヒメキニ タチ 松ムコ サダ ジシクテム  
まわのぐるく あ 同時那志きの内算を定めか 仁喜度よて相撲のきち  
キム ヒキ ヨシ 桑  
支倉か 同時三うどあくとよ琴 強あづき由仰せ あくと あくと  
コト  
ものぐるく あ 三うどあくと お墓のむす事 あくとの中將店墓の

卷之三

因鶴群多走

「さうど大将まきよりどひとまゆのぐくわへま  
大將どひま 大まとぬ算定やへかふ







東 同時内廷ミアモへ來 大將アマミで要ひてものと不文アシテあふ 内廷ミアモを大將アマミのま  
わりあふ 大將アマミのつまよ歎アハラフを草アハラフりあふ 表室ヒツギハヤ御歎フナツボを表壺ヨミテイナより  
表壺ヨミテイナよりのうアハラフをうるあふ 大將アマミの女一ミアモはうらを草アハラフりあふ 三象ミヤコのわざ  
うゑまき 宝カタマの方カタマでほ 表壺ヨミテイナをあひ大將アマミのとてをあふ 女一ミアモは一つ  
ほのたとえひよあるりあふ 表壺ヨミテイナの差人サムライは梨壺リヨウの内ミアモへとそをあふ 梨  
壺リヨウがやのさま 一ミヤコ象アヒボのとてを 仁壽ジンスウ後アフタ  
女御肉ウニ あねりあんとそ 一家ミヤコと内ミアモ御膳ウニへ來 表壺ヨミテイナ皇ミコみみんとアハラフふ  
車カマツ おほきオホキおとぎに十九日ミヤシト あくづく友アシカヅクりあふ 太政大臣オホキオトバ とまき 大餐ミヤコ  
太政大臣オホキオトバ おほきオホキ大室ミヤコのわざの内ミアモ御膳ウニよろこひやよあるりあひ女一ミアモの内ミアモ  
あうであひ表壺ヨミテイナよあきうそこ草アハラフりあふ 太大將オホミヤ大室ミヤコの内ミアモ御膳ウニよ

宰相中將ミヤコすすみ表壺ヨミテイナよさねアハラフの内ミアモへとそをあふ 新中納ミヤコみねヒダリの  
わざアハラフの内ミアモよまありあふ 同表壺ヨミテイナとくのぐれアハラフへ來 仁壽ジンスウ後アフタ  
右大臣ミコ大餐ミヤコ 仁大飯アヒボ大飯アヒボ大飯アヒボと内ミアモ御膳ウニへ來 中納ミヤコみねヒダリどアハラフ民部ミヤコつさアハラフ  
よほ心ミコニコのほどアハラフをうりあふ 民部ミヤコで中納ミヤコみねヒダリか方ミヤコ二象ミヤコのヤシとアハラフち實ミヤコのよあうで  
東 表壺ヨミテイナ皇ミコみねヒダリとそをあひすよあつあふ 表室ヒツギハヤ御歎フナツボを表壺ヨミテイナより  
壺ヨミテイナよ先ミヤコ方アハラフのまもアハラフ事 同皇ミヤコみねヒダリあふ 仁大飯アヒボとづくせのまもアハラフひ  
あアハラフゆくのまもアハラフやのよあうアハラフ事 新中納ミヤコみねヒダリ歎アハラフを表壺ヨミテイナの  
おアハラフすアハラフ、宰相ミヤコみねヒダリ中納ミヤコみねヒダリ歎アハラフを表壺ヨミテイナの  
納ミヤコみの歎アハラフよおちアハラフすアハラフてちアハラフの山アハラフのとアハラフうアハラフ事 同うアハラフぞ表アハラフさアハラフの安アハラフ天アハラフ

三衆のうちまつたる者、三衆どもよ近へ來、民衆の新宰相、まつたる三衆どもよ望むべく  
その小方 ヒツギミヤフヂツボタムアギリ  
喜びて収壺の余内をひそぐべからず、わざとまきより収壺とまとのがくふへゆふ  
喜びて歓飲を収壺よかず、女一衆あらわのふ方、五月がとうすみちうみゑヨミテイナニヤ  
あらわで深正室とゆめ縫へ來、犁壺余内、女一衆のゆいづよ伴、仰おえ  
あらわすか、同門イチニミヤとあらひよ太、大廈オトシトキ、あらわあひた、大廈とゆめ縫へゆふ  
あらわをぬ鞠オムアリひそぢくあ、同時大將シどもよびて女家をとぞあ、大廈右、大  
廈タラをぬ鞠イひそぢくあ、義人イが將シちずヒ、女二衆をぬすまをとぞあ、女家イち  
男家タラをぬ大廈の柱イの家イよおちイあ、大廈タラをぬよ魚イをまつあ、同時収壺  
あを女一衆ヨミよあらわ、巣鴨タマのす、ゆく歓飲イ、大將シども収壺タマのをま  
よ魚イをぬあらわ、同時差人タマが將シ女二衆ヨミとくタマとくタマ、犁壺タマ以後タマ

カモカバ  
赤らよ出立イダ  
着壺ミルマ夜ミチ同時車スルをせづりシテ來シテ喜安着壺ミルマ  
ゆああづき由ヨシまキコえあ 強心シラニ空西シロニ對シテよあるあアヒミのアフリくクあ  
新中納シモトどシモトの氏シモトとシモトさシモト不シモトまシモトのシモト内シモト糸シモトよおちシモトあ 新宰相シモトさシモト不シモトよシモト新中納シモトのシモトま  
ゆうあよせシモトひシモト新中納シモトのシモト想シモトもシモトのシモトをシモト内シモト糸シモトよシモト新中納シモトのシモトま  
さシモト不シモトさシモトとシモトのシモトがシモトあシモト 同シモト方シモトよシモトいやシモト 同シモト相シモトもシモト由ヨシ丈キ  
さシモトひシモト大シモト將シモトもシモトもシモトあシモト 佐シモト大シモト反シモトもシモトすシモトおシモトちシモト あシモトすシモトりシモト新シモト中シモト納シモト欲シモトをシモト着シモト壺シモトよシモトまシモトあシモト 同シモト納シモト君シモトをシモトとシモトのシモトがシモトあシモト 同シモトあシモトびシモトてシモトやシモト方シモトとシモトのシモトがシモトあシモト 佐シモト小シモト野シモト一シモトあシモト 佐シモト大シモト後シモトもシモトのシモト内シモト族シモト大シモト后シモトもシモトのシモト内シモト族シモトをシモトとシモトてシモトはシモト糸シモトのシモト二シモト家シモト坐シモト也シモト

をま家よりの由をのる 同妻家よりの娘のちにまをま家よりの由  
のを、同妻びて太夫を召てニまをま家よりの由をのる 同三うど  
年老院より妻家よりの由を相せり由奏あふ 应すらづをくあつてま家由  
を後妻よりの御正儀 女御越室の事 ことのうちあらひハさうの由家を承  
よう後女御在大臣の内女にてまを後妻女御第一の女御あり今のおほきキサキ  
おとこの内女ニの女御れいと後女御といつて此ふよしむかの女御うちのゆゑも云々 后室 中はお原  
きおとふを召あどあるりまざる 后妻女御のゆゑよゆゑよゆゑひやえあ  
同三うどをのる 同妻家よりの由をあざり 同新半  
納戸の事 とくありまをま家よりの由をあざりあひて太夫の内族こぢり  
おちまますり 同時おほきおとが八咫をまざり居らるをあざりあ おは  
みの權の事を使わおほきおとがとてあふ 御室佐内ゆゑくか階へあ

つまめー おほきおとが八咫の内連よまわらひ きののとくど年老院がくら後女  
御とくりの由をのる 后家太夫を召すまわらひ きののとくど年老院がくら後女  
御する事 大將あらどお家女一室とくりの由をのる 大將どお中納戸まし  
ごの太夫すまきらう中將あらどお大將あられ水尾伴仰の御よおちへあ  
内院の事 内院大將あらどお院のとくど年老院がくら内院 や  
家よねち由を太夫を召すまわらひ 大將あらどおよへまわらひ集ふ 妻家ニまよ  
まわらひあらひた大慶しらゆうへあひとおひきやあ 一ま妻家よりの事  
同門内くようひあ ま家よりの友人室から 一ま妻家より居あひを后室  
うくま家 后室年老院より出あ 同母ひよひまよ 八咫ちどおほきおとが

宰相中將すよし  
老翁がわらず女ニ家をぬすまさんとしや  
大將どひゆすまれか  
ドと心づひく事  
み室  
朱雀院の事  
御西院同三事  
どもむづづりしや  
宰相  
中將翁人チノミヤが將女ニ家よ心づく事  
み室  
朱雀院女ニ家をぬすまさんとしや  
女一室  
あくびの事  
室ウミさんとしづく事  
うのねぐら家極の事  
女一室よ朱  
雀院サクヰよある事  
あづき由の事  
左近のめのと宰相中將すよし  
女ニ家をぬす  
室マヲスとしゅゆをす  
漫遊院花宴ハナノニム  
此事よさうの院朱雀院の事  
もものとあふる  
事  
中納言  
きよしが大將あくびますあづき由竹せ東  
きさきの事  
もうど辰巳ともの  
事  
さよる事  
中納言  
きよしが大將あくびますあづき由竹せ東  
きさきの事  
もうど辰巳ともの  
事  
さよる事

タカドリ、ウヘノコキ

君二郎君のよきひきふ せすく は父おとよやか 源宰相君の内許よ大将どの  
あゆりあ 大将どの内父おとよ宰相君の内許よやあ 太大慶うねまき  
宰相君ワカヨキニ カヘドリ 家小君を延えあ 太大慶かて小ういあ 日の事 梅壺メイボウ 一  
かの欲を太大慶よせりあ うのうめくよみひきふ 由を太大慶よ  
やあ 太大慶の差小君内裏ウチ ラギノミヤ マキリ ワカヨキニツボ  
との對タガムカタ 宰相のよおちくまて欲をまゆあ 女アマ 大家とひいかむアミ 大  
由のあ 畏小君千字文あひきふ 大将どの女アマ よ大慶よ琴クミ 一  
うんのとみのあ うんのとみむくぐくアマ 太大慶むくアマ とうすく  
大將タケル 大將タケル 宰相のよおちくまて欲をまゆあ 女アマ 大家とひいかむアミ 大  
將タケル 家改アラタ すしの中納シナ やうまきの中將シナ されれ家極カタハ 家つアマ

るべき由ウキ をあひみかんとぞ柳アシ あへあ に思定シテ あらざの女房ウモツ のユキ 住まひて  
大家オカ 琴クミ 教タキ 料シナ の由ウキ 家極カタハ 家つアマ ざまの事 大將タケル の院の三ミ どミ 家極院  
よ大家オカ 琴クミ 教タキ 由ウキ 奏マジン さがの院大將タケル のを召タシ あ 同一象家タネマサ のカタハ  
の内ウチ 仰カセ あ 大仙名ミヅシニヤウ 同アメ 大家オカ 琴クミ 教タキ ことタシ 大將タケル の奏マジン あ 同アメ  
大カセ 仰ミス あ 大仙名ミヅシニヤウ 同アメ 大家オカ 琴クミ 教タキ ことタシ 大將タケル の奏マジン あ 同アメ  
づく由ウキ 中納シナ すしスシ 大將タケル の大將タケル のよおちくまして山翁サンガタリ あ 中納言  
づく風ウキ の簾カゼ を吹フキ ひぐヒグ 際ヒダ あり 大家オカ とほのうまウマ 同アメ 大家オカ とほのうまウマ 同アメ  
同アメ 家極カタハ のよもすウカシ きかひりまきの事 家極カタハ のよもすウカシ あ 同アメ 大家オカ とほのうまウマ 同アメ  
院サカナ よりものあ 大家オカ とほのうまウマ 同アメ 家極カタハ のよもすウカシ あ 太大慶タケル うねまき うんのぬくヌク うの

ぐさう 同大將どよりきよ京極どひを三めぐりあふ 大室よ琴をへまふ  
車 あめりは後めのとひ絆モトよ大室のゆくとをあふ 大室いとよく  
琴ニダリノオトあめりかふ 左大廈後壇女序フチノホノの店方よまありあひ 旗袍腰帶キコモトノカタリキコ  
源中納ミナヒもとを大將どひよあめりあふ 大將どひ内裏院ウチヰよまありあふ  
院のもうど大室の琴習キムナラひあひ慈サマをくづねあふ 大將どひ女つまの店方おそく  
ます事 同父おどぐの内許ミチよあめりあふ 室女一室 大將どひよこひやミコロりてあめりあふ  
大室の琴キムノネ習ハシメキニひとよまありあふ 大將どひ内裏ウチナ一室ミツシキよまありあふ  
ひうんのとひむうヒムウと呂ル公コあふ 大將どひ源中納ミナヒどひよおちオチあふ 同時  
中納ミナヒどひ雅ヒメキニを三ミをあふ 大室の琴習キムナラひとめぐりあひ慈サマをすとあひをび

てすめりばき由ヨのあひらラあふ 大將どひ女一室の店方よ相そくまへて歌  
をまめりあふ 同正月二日 内院ウチヰム裏室 室外リヤソトのゆくとよまありあふ 室女一室  
大將オカタどひよこひやヒコトあめりぬ事 大室母オカタモハニヤ女一室ミツシキをくづひて歌ハシメをよまあふ 菊日  
うんのとひうこをよまあふ 京極キヨクの五月のをく左大廈フチノホノよくあふ 旗袍キコ腰帶キコモト  
後アラヘよこイデあふ 同夜源中納ミナヒもとをくびて大室の琴キム強ヒキ小コトハを吹スをあふ 同夜  
すまへあふ 同夜源中納ミナヒもとをくびて大室の琴キム強ヒキ小コトハを吹スをあふ 七月  
大將オカタどひの故治コジ院イニのをすくあふ 同夜うんのとひ左大廈フチノホノをくび  
え極エキシどひよこひの京極キヨクの人の効ヒキときがふくし物ヨタリ手サハに人ヒト將オカタてまある車キハ ほ人の  
ふどもと大將オカタどひよこひ 八月十五日 大室琴キムあめりひもとあつよろくび  
もんとあくろ殺マサケあふ 同日 席シテあめりあふ 旗袍キコ腰帶キコモト 源中納ミナヒさうの

院より内をひだるの琴うすある由奏あふ 八月十五日いぬまの琴うす  
三あべき由奏あふ 大將どひ八月十五日の店へ殺へあふ 二日おもてます  
べき由院より始まりゆくよやあ 素極の家より序章ゆく  
あら大庭まさう 大室をほのうすあふ 序章一院 東音院 内侍督大室  
をほのうすあふ 大將どひ口人の舞をほのうすあふ 序章一院 東音院 内侍督大室  
あさがの院内侍督よ琴弦あづき由行せあふ 内侍のまことうろく風の琴弦  
あ同琴音内裏までゆる事 内のまこと琴音度をゆひ差人オカタシマセが將  
ふくよくねきをあふ 同和をもり琴音をこづみて素極どひよます  
内侍督ち風の琴弦あふ さがの院内侍を内侍のまよあふ 茶雀院内侍を  
内侍のまよあふ たまらうく風の琴弦あふ 一院いぬまの琴弦あふをとあふ

此日の勅賞よりかへり故治院モトハラヒより友佐僧オツあふ 茶雀院  
内侍をた大庭オカタより 大將どひゆくよものまよあふ

詞花堂藏板

姓序考

細井貞雄大人著

一冊 既刻

三代實錄補遺

右同

二冊 附刻

空物語玉琴

右同  
異本考訛条

三卷四卷五卷未刻

五十音考

右同

一冊 未刻

地名類聚

右同

二十冊 未刻

文化十二年乙亥七月

江戸中稿廣小路

製本所

西宮彌兵衛

